

磐城新聞

行發日八月七
刊休日翌日祭曜日

此の頃の雑感上

八幡 秋月

山のシーズンが来た。正に其の離去する當り過ぎる程の當り。男性味、豊かな山に。丘陵は濃き緑に匂ひ伏せる。高き峰は朗かに招く。天心まで澄み透る大空の限りなき明らかなる。其の中にもうすうすに故人となつて仕舞ひて登り来る勇士の丈夫達を待つてゐるのだ。

山は朗。一切の雑音から離れた山は朗。朗かだ。其處には悪しみもなければ、悲しみもない。義務もなければ人情もない。只限りなき朗かさがたふふばかりなのだ。

だが。山は朗かでも人の世は暗い。巷々に吹き荒ぶ風は陰鬱だ。世相の暗さを物語る。生きたるが爲の惨劇と生きたるが爲の悲劇。生きたるが爲の悲劇と生きたるが爲の惨劇。生きたるが爲の悲劇と生きたるが爲の惨劇。

暗い世相の渦巻に人の心は毎日荒んでゆく。只黄金のみの燃然と光を放つ、吾が身を護る爲には親友も捨てねばならぬ。利害相反する時、兄弟も相争ふ。昨今、友の一人、二人と離れてゆく。別に不思議はないのだ。假令それが親友と名のつく人達であつたとしても。

飢えては柔順な畜犬も容易に荒んだ猛犬と變る。生きたるが爲には骨肉も互に相食まねばならぬ事がある。金の前に拜跪して黄金の爲の間にさへ救ひ得ぬ深い危れには不義理を恥ぢず、裂の生ずる事もあるのだ。利の鼻息を嗅ぎ、利の鼻息を嗅ぎ、利の鼻息を嗅ぎ。

水清ければ大魚無し。聖人は愚なるが如く清濁併せて呑み。人の選り好みは付けず。又寛容其の度量を取つて是非を分けて身は一見愚のやうであるが家を治め身を慎みて行くのである。

拈華微笑 炭屋さん丈に深
忘れた頃に蒸し
返される領産税
委譲。大抵降参
税になつた
税になつた
税になつた

最近不快な事二つ、片寄
對島田氏の論争其の一つ、
途上漫筆の小野氏に對する
吉澤氏の反答その二つ。
火事と喧嘩は吾が身にかけ
らねば面白くないのだ。そう
だ。土人夫の争ひかなん
かの様に、野郎、五郎の
馬鹿の、ぬすものどり合
ふのは見よものぢやない
面白くない。

雨降り (童謡詩)
盛 菊 枝

潮聲視静抄帳 (六月集) 9
赤羽 松堂 第二撰

孤舟 十里
芳月 眞常
眞常 眞常
眞常 眞常

百姓の歌 (五月六月)
吉 澤 生

お蘭陀お蝶 (75)
渡邊 黙 作
布 施 長 春 書

健康と精神 松本玲一

動物は食ふ爲に働く、我
々も亦動物と云ふ大きな範
圍内に在つて生活し、そこ
には智慧の發達と云ふ一事
あるのみだから食ふ事には
多大の犠牲を拂はなければ
ならない。故に生活費の大
部分が食料に費され、活動
の大部分が食物を獲得する
仕事である。人若し食物を
獲るに生命に別状なく働
く事が出来たとしたら、
立派な家を建設する事は
供が積み木遊びをする位な
ものであらう。餘裕ある生
活が出来仕事も楽になる。
平地の面積の大部分は耕
地として作物を栽培せられ
る。その向不足を告げて新
開地の開墾事業を起し、多
くの勞力と經費を計上し
てゐる。耕地に比すれば住
宅地等は極めて狭小である
食物の爲には氣候が悪く、
生活に不便な地方へ居住す
るのを餘儀なくされ又國家
政策より見るも社會政策よ
り見るも移民や海外發展の
獎勵は有意義である。大部
分の人は先づ食へなくなる
事が心配の種である。不作
や飢饉に襲はれると食物の
争奪に平和な社會の秩序は
其の統正を失ひ、たまたま
修繕場と化し、動物性を遺
憾なく發揮する。
人は植物を栽培し、動物
を飼育し、所謂生物を愛護
するが、五穀實れば之を刈
取つて食物とし動物肥れば
屠殺して食ふ、平和は永続
する事なく一旦戦争開始せ
る事なく、殺人力も強い
人が豪傑であり英雄である

お蘭陀お蝶 (75)
渡邊 黙 作
布 施 長 春 書

お蘭陀お蝶 (75)
渡邊 黙 作
布 施 長 春 書

お蘭陀お蝶 (75)
渡邊 黙 作
布 施 長 春 書

お蘭陀お蝶 (75)
渡邊 黙 作
布 施 長 春 書

お蘭陀お蝶 (75)
渡邊 黙 作
布 施 長 春 書

お蘭陀お蝶 (75)
渡邊 黙 作
布 施 長 春 書

お蘭陀お蝶 (75)
渡邊 黙 作
布 施 長 春 書

お蘭陀お蝶 (75)
渡邊 黙 作
布 施 長 春 書

縣大會出場
警中選手決定

警中選手決定
過級中對戰に於て二百米
四百米、棒高跳の自校記録
八百の縣下最高記録を破つ
た警中競技部では八月一日
に警中競技部では八月一日
に警中競技部では八月一日

警中選手決定
過級中對戰に於て二百米
四百米、棒高跳の自校記録
八百の縣下最高記録を破つ
た警中競技部では八月一日

